

2023年2月5日 午前礼拝
「天の御国の生き方Ⅰ」心の貧しい者 説教者:堺希望伝道師

【引用聖句】

マタイ 5:1~3

1. この群集を見て、イエスは山に登り、おすわりになると、弟子たちがみもとに来た。
2. そこで、イエスは口を開き、彼らに教えて、言われた。
3. 「心の貧しい者は幸いです。天の御国はその人たちのものだから。

【説教要約】

①

マタイ 5:1, この群衆を見て、イエスは山に登り、おすわりになると、弟子たちがみもとに来た。

マタイ 5:2, そこで、イエスは口を開き、彼らに教えて、言われた。

先回は、イエス様がこの地上に天の御国をもたらしてくださったことについて見ました。

マタイ 4:24, イエスのうわさはシリア全体に広まった。それで人々は、さまざまな病気や痛みに苦しむ病人、悪霊につかれた人、てんかんの人、中風の人などをみな、みもとに連れて来た。イエスは彼らをいやされた。

マタイ 4:25, こうしてガリラヤ、デカポリス、エルサレム、ユダヤおよびヨルダンの向こう岸から大ぜいの群衆がイエスにつき従った。

天の御国とは、エデンの園で人が持っていたような、神様との親しい関係のことです。天の御国の王はイエス様です。イエス様を求めて行った人たちは、この世にあって、まるで罪のない天の御国を体験したのです。

今日も、イエス様を求め自分の救い主だと信じるならば、神様との親しい関係が回復されます。イエス様とともに生きる時、天の御国に住んでいるのです。

さて、今日から見ていくのは通称「山上の説教」と呼ばれます。5～8章全部が山上の説教です。イエス様が語られた一つの長い説教です。

マタイ 5:1, この群衆を見て、イエスは山に登り、おすわりになると、弟子たちがみもとに来た。

この説教は、イエス様のもとに来て、御国を体験した人たちに語られました。すべての人に語られたのではなく、今日でいうクリスチャンに語られたのです。天の御国に生きることは、イエス様とともに生きることです。それが、実際どのような生き方なのか、イエス様が語られたのです。

おすすめしたいのは、この5～8章の山上の説教を、一度通して読むことです。イエス様とともに生きる姿が、生き生きと描かれているので、大きな励ましを受けることになるでしょう。

②

マタイ 5:3, 「心の貧しい者は幸いです。天の御国はその人たちのものだから。」

最初に、8つの「幸いです」という格言から始まります。

そのひとつ目が、「心の貧しい者」です。これは、自分の心が決して満たすことのできない虚しいものであると認めている人のことです。旧約聖書の、ヤコブという人を例に見たいと思います。彼が、神と出会うことで、人生に何が起きたかを見ます。

ヤコブは、創世記 25章から登場する、イスラエルの先祖です。一言でいえば、ヤコブはとてつもない賢い人でした。人を騙すことに、特に長けていました。自分が欲しいもののためには、人を騙して手に入れる人物でした。

彼はイサクという父の、次男として生まれました。ヤコブはある日、兄のエサウという人が空腹で仕方がない時、長男の権利と引き換えに食べ物を与える取引をしました。この時代、長男が家督を継ぎ、財産のほぼすべてを受け継ぐことになっていました。ヤコブはエサウが困っているときに、長男の権利を彼から獲得したのです。

父イサクが老齢になり、目がほとんど見えない時、ヤコブは母と共謀して、本来兄が受けるはずだった家督を継ぐ儀式を横取りするのです。父の目が悪いことに付け込んで、父を騙したのです。このことでヤコブは兄から殺すほど憎まれることとなります。

叔父のラバンのところに避難して暮らすことになるのですが、そこで叔父の次女ラケルと結婚したいと思いました。ところがラバンは、ヤコブと同じようにずる賢く、娘を利用してヤコブを働かせました。14年もの間、結婚を条件に働かせたのです。ヤコブ自身、自分が得るために人を騙し、同じように人から騙される人生だったのです。

そんなとき、神様はヤコブに、生まれ故郷に帰りなさいと命じられます。その道中、なんと、兄のエサウが大群を連れて迎えに来ているという知らせを受けるのです。

創世記 32:6, 使者はヤコブのもとに帰って言った。「私たちはあなたの兄上エサウのもとに行ってきました。あの方も、あなたを迎えに四百人を引き連れてやって来られます。」

創世記 32:7,そこでヤコブは非常に恐れ、心配した。それで彼はいっしょにいる人々や、羊や牛やらくだを二つの宿営に分けて、

創世記 32:8,「たといエサウが来て、一つの宿営を打つても、残りの一つの宿営はのがれよう」と言った。

ヤコブは今、自分の生き方の報いを受けると思って恐れました。兄が自分に復讐しに来たのだと思ったのです。そう思ってもまだ、ヤコブはずる賢く生きることをやめられませんでした。もし攻撃されても、財産が残るように考えたのです。

彼はその時、必死に祈りました。

創世記 32:9, そうですね、ヤコブは言った。「私の父アブラハムの神、私の父イサクの神よ。かつて私に『あなたの生まれ故郷に帰れ。わたしはあなたをしあわせにする』と仰せられたまよ。

創世記 32:10, 私はあなたがしもべに賜ったすべての恵みとまことを受けに足りない者です。私は自分の杖一本だけを持って、このヨルダンを渡りましたが、今は、二つの宿営を持つようになったのです。

創世記 32:11, どうか私の兄、エサウの手から私を救い出してください。彼が来て、私をはじめ母や子どもたちまでも打ちはしないかと、私は彼を恐れているのです。

創世記 32:12, あなたはかつて『わたしは必ずあなたをしあわせにし、あなたの子孫を多くて数えきれない海の砂のようにする』と仰せられました。」

ヤコブが直面したのは、「果たして、自分の人生は本当に豊かだったのだろうか」ということです。人生を上手に生き、得をするために彼は賢く、またずるく生きました。長男の地位を横取りし、願った娘たちと結婚しました。祈りにあったように、財産も多くなりました。しかし、彼は多くを人生で持っているようでも、その心の中心はそうではありませんでした。

彼の心の中心にあったものは、「恐怖と不安」です。これは今に始まったことではなく、彼の人生の初めからそうだったのだと思います。恐怖と不安の人生だから、彼は他人より得をする人生を求めてきました。実際に多くを得て豊かになったように見えたが、心は何も変わっていなかったのです。

今、兄エサウが復讐にやってきたとあって、彼は心の中心があらわにされたのです。それは、彼の心が富んではおらず、貧しいという事実です。大きな挫折に出会うと、今まで知らなかった自分の内面を知る、というのは今もよく言われる話です。何事もない日々の中では意識していませんが、私たちの心が穏やかなのは、私たちの心が強いからではなく、ヤコブがそうであったように自分の願ったとおりに人生が運んでいるためかもしれません。

しかし、自分にとって大切なものが失われるとき、私たちは自分の心がどれほど虚しく、弱く、醜いかわかるのです。

③

マタイ 5:3, 「心の貧しい者は幸いです。天の御国はその人たちのものだから。」

ですので、人は大切なものが危機にさらされるのを嫌います。しかし思い出していただきたいのは、イエス様は、自分自身がどれほど貧しい心であるか知っている人について、「幸いです」と言ったことです。それは、「天の御国がその人たちのものだから」とあります。

ヤコブの続きを見ます。ヤコブは、自分の貧しさに向き合わされました。そのあと、何が起きたでしょうか。

創世記 32:24, ヤコブはひとりだけ、あとに残った。すると、ある人が夜明けまで彼と格闘した。

創世記 32:25, ところが、その人は、ヤコブに勝てないのを見てとって、ヤコブのもものつがいを打ったので、その人と格闘しているうちに、ヤコブのもものつがいははずれた。

創世記 32:26, するとその人は言った。「わたしを去らせよ。夜が明けるから。」しかし、ヤコブは答えた。「私はあなたを去らせません。私を祝福してくださらないければ。」

創世記 32:27, その人は言った。「あなたの名は何というのか。」彼は答えた。「ヤコブです。」

創世記 32:28, その人は言った。「あなたの名は、もうヤコブとは呼ばれない。イスラエルだ。あなたは神と戦い、人と戦って、勝ったからだ。」

創世記 32:29, ヤコブが、「どうかあなたの名を教えてください」と尋ねると、その人は、「いったい、なぜ、あなたはわたしの名を尋ねるのか」と言って、その場で彼を祝福した。

創世記 32:30, そこでヤコブは、その所の名をペヌエルと呼んだ。「私は顔と顔とを合わせて神を見たのに、私のいのちは救われた」という意味である。

ヤコブの元に、神様ご自身がやって来られて、彼と格闘されたのです。一見、意味が分からないかもしれませんが、要点は「ヤコブが必死になって神様に縋りついた」ということです。

自分の心の貧しさを思い知った彼は、「神しか自分を本当に満たすことはできない」とわかったのです。それで彼は、神様が直接祝福してくださるまで、縋りついたのです。今までヤコブは、自分の賢さやずるさで人生を豊かにしようとしてきました。しかし今ヤコブは、神が与えてくださらないければ、心の貧しさが満たされることはないと分かったのです。

この後のヤコブは、以前の彼ようではなくなります。自分が助かるためにずる賢く生きていたところから、最前線に自分が出ていく生き方に変わるのです。これは、神が彼を変えてくださった結果です。

イザヤ 57:15, いと高くあがめられ、永遠の住まいに住み、その名を聖となえられる方が、こう仰せられる。「わたしは、高く聖なる所に住み、心碎かれて、へりくだった人とともに住む。へりくだった人の霊を生かし、砕かれた人の心を生かすためである。」

神様の祝福を知るためには、神様との交わりを味わうには、自分の心が貧しいことを知ることから始まります。自分の心が、実はみじめで醜く、救いようがないという虚しいものだという自覚です。多くの人は、そこから脱出するために、あるいは目をそらすために人生を豊かなものにしようと努めます。

しかし神様は逆で、心が貧しいと認める人とともにいてくださるのです。そして、絶対に満たすことのできない、心の最も深い貧しさを、満たしてくださいます。